『源氏物語』夕霧巻における皇統と藤原氏の対立構造

―方法としての人物呼称・邸第呼称―

宮内理伽

はじめに

女三宮の降嫁を朱雀院が思案することから始まった第二部の物語は、不義の子の誕生、柏木の死、女三宮の出家という結末を迎え、光源氏の後半生に暗い影を落とした。女三宮の持仏眼供養を描く鈴虫巻と紫の上の死を描く御法巻の間に配された夕霧巻は、大筋の流れからは外れて、夕霧が起こした恋愛騒動に主眼が置かれている。夕霧巻については、早くに藤村潔氏が「物語の結末にあたって作者の補足した物語」であると指摘したが、[1] 伊藤博氏が疑義を呈す通り、[2] 夕霧巻を後から補入したと見る論者は少なく、挿話的な巻が何故ここに配置されているかという観点から考えられてきた。宇治十帖の先蹤や予告と見るのが、藤村潔氏や石田穣二氏[3]である。一方で、第二部で描かれた女の「宿世」を夕霧巻が相対化するという論や、[4] 第二部の光源氏の物語そのものを、夕霧の物語が相対化すると見る論も多く、[5] 夕霧巻は第二部との繋がりも指摘されている。

巻そのものの位置づけに関して注目が集まる一方で、表現や引用についても研究が重ねられてきた。和歌的な表現に注目したのが、小町谷照彦氏[6]や上坂信男氏、[7] 植田恭代氏[8]である。他にも、落葉宮の「名」に関する論[9]や『竹取物語』引用に関する論[10]も提出されている。また、朱雀院皇女である落葉宮を夕霧が得た政治的な意味は重く、早くに史上の皇女の降嫁の実態から落葉宮を論じた後藤祥子氏[11]のほか、加藤昌嘉氏、[12] 久下裕利氏[13]の論がある。先行研究では、皇女落葉宮の獲得の意義に注目が集まってきた

が、落葉宮を得たということは、その反面、雲居雁がただ一人の正妻ではなくなったことを見過ごしてはならない。雲居雁は藤原氏太政大臣家の娘であり、「三条の北の方」（若菜上(3)二六八頁）として夕霧の生活基盤を支えてきた。夕霧が落葉宮に接近したことは「大殿」太政大臣家の強い反発を招き、夕霧をめぐる皇統と藤原氏の対立を決定的なものとしている。本稿は、夕霧巻を皇統と藤原氏の対立から読み解くため、雲居雁「三条殿」呼称、落葉宮「一条の宮」呼称などの人物呼称・邸第呼称を分析の対象とする。なお、「三条殿」「一条の宮」などの呼称は、邸を示す呼称としてだけでなく、そこに住む人物の呼称としても用いられるため、人物呼称・邸第呼称（もしくは呼称）と本稿では表記する。

何故人物呼称・邸第呼称に注目する必要があるのか。背景に、夕霧巻の特徴的な場面展開がある。「まめ人」（夕霧(4)八九頁）夕霧が「一条の宮」（同）落葉宮に心惹かれるという叙述から始まる夕霧巻は、夕霧が落葉宮と雲居雁の邸を往還しながら、落葉宮との関係を強引に進めていくことで、場面が展開していく。雲居雁の「三条殿」、落葉宮の「一条の宮」という人物呼称・邸第呼称は、場面が移り変わる際に冒頭に置かれることで、場面展開を読者に明示する機能を果たしている。しかし、それだけではない。藤裏葉巻での結婚以降、夕霧と「三条殿」で同居してきた正妻雲居雁にとって、次第に夕霧が「一条の宮」に「住みつき顔」（一三九頁）「見馴れ顔」（一五一頁）をするようになることは、許しがたい事態であった。このことは、正妻と同居する事例が多く見られる平安時代中期の婚姻の実態をよく反映している。[14] 邸の問題は、雲居雁・夕霧・落葉宮の三者の関係性を読み解く上で重要な要素の一つであり、物語は邸に関する叙述を巧みに操りながら夕霧をめぐる皇統と藤原氏の女君の対立を描き出していく。「三条殿」「一条の宮」という対比的な呼称は、夕霧巻の皇統と藤原氏の対立構造の言わば形象化であり、本稿は呼称に注目することで、夕霧巻の構造を明らかにすることを目的とする。

一つ留意しておきたいのが、「三条殿」「一条の宮」などの人物呼称・邸第呼称については、その用例が人物呼称か邸第呼称か明確に判別できない場合があるという点である。一例として、落葉宮の「一条の宮」呼称を取り上げたい。落葉宮を示す「一条の宮」という呼称が物語で最初に用いられるのは、夕霧と落葉宮の交流が始まる柏木巻である。その端緒は、死の床に就いた柏木が、親友である夕霧に対し「…一条にものし給宮（＝落葉の宮）、事に触れてと

ぶらひきこえ給へ」（柏木(4)二五頁）と依頼したことである。夕霧巻以前に見られる全六例のうち、その初例は、「一条の宮には、ましておぼつかなくて、別れ給にしうらみさへ添ひて、日ごろ経るまゝに、…」（三二頁）である。「おぼつかな」く思うのは落葉宮と考えられることから、この「一条の宮」は落葉宮であると思われるが、この後に続く「一条の宮にまうでたまへるありさまなど聞こえ給。」（三七頁）「かの一条の宮にも、常にとぶらひ聞こえ給。」（三九頁）「かの一条の宮をも、この程の御心ざし深くとぶらひきこえ給ふ。」（横笛(4)四八頁）の三例については、「一条の宮」が邸第なのか落葉宮なのか、それとも一条御息所や女房たちも含む一条の宮全体なのか明確に判別し難い。「一条の宮」などの邸第の名に因む呼称には、邸第だけでなく、女主人、邸に住む家の構成員、女房集団まで含意されるからである。それでいて、夕霧の主たる目的は落葉宮である。柏木の遺言は一条の宮を頻繁に訪問することの建前に過ぎず、丁重に「まうづ」「とぶらふ」ことをしながら、落葉宮へ接近する隙を窺っている。人物呼称と邸第呼称は明確に弁別し難いものであり、むしろそのあわいにこそ意味があるようにも思われる。近年邸第呼称は注目され、櫛井亜依氏[15]や飯田実花氏[16]によって、六条院の「大殿」呼称、二条院の「院」呼称、女三宮の「三条の宮」呼称に関する論などが発表されている。稿者も邸第呼称に関する論を提出しているが（以下前稿と称す[17]）、こうした論では、人物呼称と邸第呼称を明確に区別してきた。本稿は人物・邸第の双方を含意する呼称の表現性に留意し、人物呼称・邸第呼称の双方について包括的に論じていく。

『源氏物語』の本文は、新日本古典文学大系（岩波書店）から引用する。また、桐壺巻から幻巻までを正編とし、桐壺巻から藤裏葉巻までを第一部、若菜上巻から幻巻までを第二部、匂宮巻から夢浮橋巻までを第三部と称する。また、頭中将などの官職によって呼称が変化する作中人物は、便宜上最も一般的な呼称に統一し、必要に応じて付記する。

一、夕霧巻における「三条殿」と「一条の宮」

本節では、夕霧巻における「三条殿」雲居雁と「一条の宮」落葉宮の対立を呼称という観点から考察していく。まず、本稿の前提として夕霧巻に見られる呼称について概観したい。以下は作中人物ごとの夕霧巻における呼称である。

夕霧　（人物）大将、大将殿、君、をとこ、殿、大将

の君、をとこ君

雲居の雁　（人物）北の方、女君、本妻、女、上、三条の姫君、姫君、三条の君、母君、三条殿、大殿の君

（邸）三条殿、殿

落葉の宮　（人物）一条の宮、御子、宮、御子の君、女

（邸）一条の宮、宮

頭中将　（人物）大殿、父おとど、おとど、殿、致仕の大殿

（邸）大殿

光源氏　（人物）六条の院、院

（邸）六条の院

雲居雁、落葉宮、頭中将（致仕大臣）、光源氏の四者において、邸と人物に対して同一の呼称を用いている。夕霧の父光源氏は皇統、雲居雁の父頭中将は藤原氏であり、ここにも皇統と藤原氏の両者が密接に関係している。第一節では「三条殿」と「一条の宮」を論じるが、第二節では、頭中将「大殿」と光源氏「六条の院」について取り上げることにする。

夕霧巻を論じる前に、夕霧が落葉宮に初めてその意中を打ち明ける横笛巻の想夫恋の合奏の場面を見ておきたい。この場面の冒頭は、

秋の夕のものあはれなるに、一条の宮を思ひやりきこえ給で、渡り給へり、…　（横笛(4)五三頁）

と、夕霧が秋の夕べに「一条の宮」を訪れたことが語られている。訪問が突然であったのか、落葉宮は琴を仕舞うことが出来ないまま、夕霧を「南の廂」（同）まで引き入れた。通常、男が意中の女を訪問した際には、廂よりも外側にある簀子に座を設ける。正式な客人を出迎えるハレの場である寝殿の南の廂の間に座を設けることは、落葉宮側が夕霧を客として丁重にもてなしていることを示しているが、夕霧は図らずも御簾の内側から漏れ出る「端つ方になりける人（＝落葉宮）のいざり入りつるけはひ」「衣のをとなひ」「大方の匂ひ」（同）をはっきりと感じることになった。一条の宮の風雅な様子に、夕霧は「わが御殿の明け暮れ人しげくて物さはがしく、幼き君たちなどすだきあわて給ふにならひ給て、いとしづかに物あはれ也。」（同）と「わが御殿」（傍線部）三条殿の乱雑な雰囲気を思い出す。三条殿には雲居雁と多くの子どもたちが暮らしており、家庭的な匂いの強い空間であった。夕霧は「しづか」で「物あはれ」な一条の宮と「人しげく」「物さはがし」き三条殿を比較し、優美な雰囲気を湛える一条の宮に強く心が引

き寄せられる。想夫恋の合奏の後、三条殿に帰宅した夕霧は、邸の乱雑な様子に「有つる所（＝一条の宮）のありさま思ひ合はするに、多く変はりたり」（五八頁）とまた二つの邸を比較しているのだが、二つの邸の描写の対比に、夕霧の心の揺らぎが繊細に表現されている。

夕霧の恋物語では「一条の宮」と「わが御殿」の二つの邸の描写の対比が、この一連の物語を彩る一つの表現方法となっているのである。家庭的な三条殿で暮らす夕霧にとって、風雅な一条の宮は別世界であった。夕霧巻が「まめ人の名を取りてさかしがり給大将、この一条の宮の御ありさまをなをあらまほしと心にとゞめて、…」（夕霧(4)八九頁）と始まるのも、幼少期から多くの時間を三条殿で過ごしてきた夕霧が、「三条殿」という邸を離れて「一条の宮」という別の邸に住む女君を求めているという心の位相が象徴的に示されている。ただし夕霧巻よりも前の横笛巻では、夕霧は雲居雁が住む三条殿のことを「わが御殿」（五三頁）と呼ぶことには留意しておきたい。あくまで夕霧の本邸は三条殿である。若菜下巻では同様に、雲居雁のことを「わが北の方」(3)三四七頁）と呼んでいる。夕霧の邸は三条殿であり、そこに住む雲居雁が正妻であることは揺るがない。世の中の人もまた雲居雁を「三条の北の方」（若菜上(3)二六八頁）と呼んでおり、夕霧からも世間からも雲居雁が夕霧の正妻として重んじられていたことがその呼称からうかがえる。

以上を踏まえた上で、夕霧巻における「一条の宮」（三例）「三条殿」（四例）という呼称について見ていきたい。以下に順に掲げる。

①まめ人の名を取りてさかしがり給大将（＝夕霧）、この一条の宮の御ありさまをなをあらまほしと心にとゞめて、…　（夕霧(4)八九頁）

②大将殿（＝夕霧）は、この昼つ方、三条殿におはしにける、…　（一一一頁）

③道すがらも、あはれなる空をながめて、十三日の月のいとはなやかにさし出でぬれば、小倉の山もたどるまじうおはするに、一条の宮は道なりけり。　（一三〇頁）

④殿（＝夕霧）は（一条の宮の）東の対の南をもてを、Aわが御方を仮にしつらひて、B住みつき顔におはす。三条殿には、人ゝ、「にはかにあさましうもなり給ひぬるかな。いつのほどにありし事ぞ」とおどろきけり。　（一三九頁）

⑤六条院にぞおはしてやすらひ給ふ。東の上（＝花散

里）、「一条の宮渡したてまつり給へることと、かの大殿わたりなどに聞こゆる、いかなる御ことにかは」と、いとおほどかにの給ふ。（一四一頁）

⑥（夕霧ガ）かくせめても見馴れ顔につくり給ふほど、三条殿（＝雲居雁）、限りなめりと、さしもやはとこそかつは頼みつれ、まめ人の心変はるはなごりなくなむと聞きしはまことなりけりと、世をこゝろみつる心ちして、…（一五一頁）

⑦（夕霧ハ）三条殿に渡り給へれば、君たちもかたへはとまり給へれば、…（同）

①は夕霧巻の冒頭である。「一条の宮」落葉宮に強く心惹かれる夕霧は、一条御息所の療養のため小野の山荘に移った落葉宮のもとを訪れ、強引に宮に迫った。宮は拒み通したが、二人が一夜を共にしたという事実は出入りする律師によって、宮の母一条御息所が知るところとなり、煩悶した御息所は夕霧の誠意を質す文を贈る。折しも、夕霧は「三条殿」（②）に帰っていたところであった。御息所からの文は雲居雁に奪われ、その日夕霧は落葉宮のもとを訪れることはなかった。この一件は結果として御息所の死を招くことになるのだが、緊迫した場面の冒頭で「三条殿」という呼称が用いられた背景には、夕霧がどちらの邸に滞在しているのか明示する必要があるからであろう。「三条殿」という呼称の初例は、藤裏葉巻で雲居雁と夕霧の結婚が許された際に、かつての左大臣邸に居を構えたことを叙述する「御いきおひまさりて、かゝる御住まひもところせければ、三条殿にわたり給ぬ。」（③一九三～四頁）という一文であるが、この用例以降「三条殿」という呼称は正編において夕霧巻のみしか見られない。藤裏葉巻以降物語に長く登場しなかった「三条殿」という呼称は、落葉宮の居場所と異なる邸であることを象徴的に示すために、再び必要とされたのである。

③は御息所の死後小野の山荘を訪れた帰り道、「一条の宮」の前を夕霧が通りかかる場面である。この後、夕霧が一条の宮を改築し住みつくようになる。④は、宮の東の対に「住みつき顔」（傍線部B）をしている夕霧に対し、「三条殿」側の人間は仰天するという叙述である。ここで、「三条殿」と明示されるのだが、夕霧が三条殿から一条の宮へと移ったことの裏返しとして、雲居雁の邸が「三条殿」として前景化するのではないか。ただし、三条殿はもはや「わが御殿」ではない。むしろ、一条の宮の方が「わが御方」（傍線部A）となった。「わが」がどちらにつくかという小さな違いに、夕霧の意識の変化が表れている。⑤は夕霧の

養母花散里の発話であるが、花散里が落葉宮を「一条の宮」と呼んでいることから、この呼称が落葉宮の社会的な立場を表す呼称になっていることが分かる。

ここまで夕霧を拒み通してきた落葉宮であったが、ついに一条の宮の塗籠の中で契ると、夕霧は邸の主人として振る舞うようになった。⑥は、一条の宮に「見馴れ顔」（傍線部）をする夕霧を見て、雲居の雁が「限りなめり」と夫婦関係の破綻を悟る叙述である。注目したいのが、夕霧と落葉宮の関係が後戻りできない段階まで進むと、初めて雲居雁その人が邸の名を用いて「三条殿」と呼ばれるという点である。この用例以降、第三部にかけて雲居雁は「三条殿」（匂宮(4)二一四頁、竹河(4)二五四頁）と呼称されるようになっていく。

ここで考えたいのが、女君を邸第の名で呼ぶとき、どのような意味合いが含まれるかという点である。例えば、『小右記』寛仁二年（1018）十二月十六日条では、藤原道長の二人の妻源倫子と源明子を「北の方（＝倫子）幷に高松殿（＝明子）等、捧物有り。」と呼び分け、明子を邸第の名で呼んでいる。早くに梅村恵子氏は、倫子腹の男子と明子腹の男子の官位の昇進を比較し、左大臣源雅信の娘倫子が嫡妻であり、源高明の娘明子は妾妻であると明らかにしている。[18] 平安時代の婚姻研究については、どの段階から嫡妻が定まるのか、新たな妻を迎えるにあたって離婚は必ずしなければならないのかなどの点において、さまざまな説が提出されている。しかし、藤原道長の二人の妻に明確な差があったことは確かなようで、『小右記』長和元年（1012）六月二十九日条では「高松殿〈左府（＝道長）の妾妻。陽明門。〉」と、明子を明確に「妾妻」と呼ぶ。つまり、『小右記』では、嫡妻倫子が「北の方」、妾妻明子が「高松殿」と邸第の名で呼ばれているのである。この呼び分けは、先学においてすでに問題となっており、例えば福長進氏は、

『大鏡』は倫子と源明子をともに「北の方」とよんでいるけれど、それぞれの所生子の処遇の違いや明子が「高松上」ともっぱら邸宅名を冠して呼称されること、何よりも『小右記』に明子は「妾」と記されていることは重く、倫子は嫡妻、明子は妾妻であった。

とする。[19] 私に、『栄花物語』『大鏡』における倫子と明子の呼び分けを調査すると、例えば、『栄花物語』では「高松殿（＝明子）の御腹の巌君は納蘇利舞ひたまふ。殿の上（＝倫子）の御腹の田鶴君陵王舞ひたまふ。」（巻七とりべ野①三四一～二頁）[20]、『大鏡』では「かかれば、この北の政所（＝倫子）の御栄えきはめさせたまへり。…また、高松殿の上（＝明

子）と申すも、源氏にておはします」（二九九～三〇一頁）と、倫子を「殿の上」「北の政所」、明子を「高松殿」「高松殿の上」と呼び分けている。この二つの呼称には、道長が終生倫子と同居し、高松殿に住む明子のもとへ通っていたという婚姻形態が反映されているだろう。道長にとって倫子の土御門第が本邸であり、明子の高松殿は別邸であった。別の場所に住んでいるからこそ、邸第の名で呼ぶ必要があるのである。

再び物語に立ち返ってみたい。夕霧が「一条の宮」に「見馴れ顔」（傍線部）をしたという叙述の中で雲居雁が「三条殿」と呼ばれるのは、「一条の宮」落葉宮が夕霧のもう一人の妻となったためではないか。「三条殿」は、一つの邸を示す呼称であり、これだけを見れば、「高松殿」明子と同じように、男君が通う複数の邸の一つでしかない。「一条の宮」という新しい妻の出現によって、雲居雁は「三条殿」という通い所の一つに相対的に転じてしまったのである。このことは、⑥以前に見られたような「三条の北の方」（若菜上(3)二六八頁）「わが北の方」（若菜下(3)三四七頁）などの「北の方」系の呼称で、雲居雁が呼ばれることが少なくなることと連動しているだろう。すでに鵜飼祐江氏が、雲居雁の呼称が、「北の方」など《夫に因む呼称》から「三条」を冠する《邸名呼称》へと変化したことを指摘しているが[21]、より踏み込んで言えば、夕霧の正妻として「北の方」と呼ばれていた雲居雁は、「一条の宮」落葉の宮の出現によって、「三条殿」という相対的な妻の立場へと転じてしまったということになる。

以上、「一条の宮」と「三条殿」という二つの呼称について論じてきた。落葉宮の「一条の宮」という呼称には、妻が住む邸とは異なる邸に住む女君に心惹かれる夕霧の心の位相が表されている。その「一条の宮」という呼称と対比される形で物語にせり出してきた「三条殿」という呼称は、夕霧が「一条の宮」に住みつくようになると雲居雁の人物呼称へと転じるのだが、雲居雁が「三条殿」と邸の名で呼ばれることによって、男君が通う一つの邸でしかないことが明白になるという仕掛けとなっている。そういう意味では、夕霧巻は藤原氏出身の雲居雁が皇統の落葉宮の出現によって「三条殿」という相対的な妻の立場へと転じる物語なのではないか。書き手は、人物呼称と邸第呼称のあわいを描き分けながら、呼称に雲居雁の位置づけの変化を託しているのである。

二、夕霧の新しい「家」の確立
―左大臣家・頭中将家からの脱却―

第一節では雲居雁の「三条殿」呼称を「一条の宮」落葉宮との関係性から読み解いてきたが、新たな妻の出現によって相対的な妻の立場に転じたこと、そしてその妻の立場が呼称に表れることは、第二部における紫の上の「対の上」呼称を想起させる。紫の上については、「女君」「姫君」「若君」「対の姫君」「対の上」「二条の君」など、多くの呼称が用いられているが[22]、その中でも、『源氏物語』にしか用例が見られない「対の上」という呼称は、紫の上の妻としての地位が反映されていると玉上琢彌氏によって指摘された後[23]、多くの論者がこの問題を取り扱ってきた[24]。というのも、正妻は主に寝殿に居所を構えると考えられるからである[25]。木村佳織氏などの反論が提出されているものの[26]、女三宮という高貴な妻の出現によってより相対的な立場に置かれた紫の上を象徴するものとして「対の上」呼称の意義が指摘されている。

そもそも夕霧巻は、第二部の女三宮の降嫁をめぐる物語とその構図が類似していることはすでに多く論じられている通りである[27]。すなわち、新たな妻の出現が前妻を苦しめるという構図において、落葉宮―夕霧―雲居の雁の関係は女三宮―光源氏―紫の上の関係に類似しており、「六条院の深刻なパロディ」[28]、「夕霧・雲居雁を源氏・紫の上の姿の陰画として位置づけようとした」[29]などと論じられてきた。「後妻打ち」の話型に見られるような後妻と前妻の対立は、若菜上巻から夕霧巻にかけて人物を代えて描かれている重要な問題であり、そうした構図を背景として、紫の上の「対の上」呼称や雲居雁の「三条殿」呼称が用いられているのである。

物語は第二部の女三宮をめぐる構図を人物を入れ換えて再び夕霧巻で描き出していくのだが、苦悩を内に込める紫の上に対し、雲居雁は夫の心変わりに不満をぶつけ、ついには子どもを連れて三条殿から出ていくという違いが見られる。こうした雲居雁の率直な行動は夕霧巻全体に戯画的な趣きを持たせることになるが、雲居雁が夫の行動を咎めることができるのは父頭中将（致仕大臣）の存在が大きいだろう。幼い頃から光源氏のもとで養育された紫の上とは異なり、雲居雁は政界の重鎮頭中将（致仕大臣）の娘であり、夕霧は頭中将家の婿として迎え入れられている。夕霧巻では前妻の「家」として頭中将家が描かれているが、頭中将家の干渉は夕霧の恋愛騒動を「家」の問題へと変えて

いる。夕霧巻が第二部の女三宮の物語の筋書きをなぞる一方で、それとは異なるこの巻独自の世界も描かれているのである。そこで、第二節では夕霧巻を「家」という観点から捉え直していきたい。

まず、雲居雁の父頭中将（致仕大臣）の動向について見ていく。頭中将は、柏木の妻であった落葉の宮にとっては義父、夕霧にとっては舅であり伯父にあたり、娘婿夕霧と落葉の宮の関係に強い不快感を示す。落葉宮は「大殿などの聞き思ひ給はむ事よ、なべての世の譏りをばさらにもいはず、院にもいかに聞こしめし思ほされん、…」（夕霧(4)一〇〇頁）、一条御息所は「あないみじや、大殿のわたりに思ひのたまはむこと、と思ひしみ給。」（一一〇頁）、花散里は「東の上（＝花散里）、「一条の宮渡したてまつり給へることと、かの大殿わたりなどに聞こゆる、いかなる御ことにかは」と、いとおほどかにの給ふ。」（一四一頁）と、この一連の事件に関係する女性たちがそれぞれ「大殿」である頭中将の意向に注意を傾けている。この「大殿」という呼称については、陳斐寧氏が、摂政・関白・准摂政・内覧に就く朝廷の執政者を表す「大殿」が、桐壺朝では左大臣、朱雀朝では右大臣、冷泉朝では主に光源氏に用られることで、それぞれの御代の執政者を明確にしていると論じた通り[30]、その御代の第一の人を指すと見られる。頭中将の「大殿」という呼称から、権力者としてこの問題に関与していることがうかがえる。

しかし、牧野裕子氏が指摘する通り[31]、各御代にただ一人だけ「大殿」呼称が用いられるわけではない。その最たる例が、光源氏と頭中将である。光源氏は絵合巻以降、頭中将（内大臣）は常夏巻以降「大殿」と呼ばれ、第二部世界では光源氏と頭中将という二人の「大殿」が存在している。しかしながら、夕霧巻では光源氏やその邸を「大殿」と呼ぶ用例は見られず、代わって頭中将やその邸が「大殿」と呼ばれている。光源氏は「六条の院」「院」と呼ばれ、夕霧に訓戒するなどの父親らしい姿を見せるものの、あくまで端役的に登場するに留まる。この巻の中で、「大殿」として常に意識されているのが、雲居雁・夕霧・落葉宮とそれぞれ密接な関係にある頭中将である。

この呼称の呼び分けには、大筋の流れから外れて夕霧が皇女を得るという物語を描く夕霧巻の内部の論理が働いているのではないか。そもそも、頭中将父左大臣には桐壺帝同腹の姉妹である大宮が降嫁しており、左大臣家は后腹の内親王が降嫁したという家の歴史を背負っている。その中でも皇女降嫁に執念を燃やす柏木は、女三宮の婿選びでは

光源氏に敗北したが、落葉宮が降嫁し、内親王を得ることができた。落葉宮降嫁には、致仕してもなお政界に隠然と力を持つ頭中将の意向が強く働いただろう。[32] 臣下たる藤原氏にとって、内親王を得ることは格別な意味があることである。しかし、その落葉宮に夕霧が接近するとなると、頭中将家の大切な人物を失いかねない。落葉宮と夕霧の醜聞は、頭中将家を揺るがす由々しき事態であり、第一の執政者を示す「大殿」という呼称が、夕霧巻では頭中将やその邸を示す呼称としてせり出してくるのは、ここに頭中将家の家としての危機感が表れているからではないか。頭中将やその家が夕霧巻で「大殿」と呼ばれる一方で、それまで「大殿」と呼ばれることが多かった光源氏が「六条の院」「院」として後退するのは、この問題についてはあくまで傍観者にとどまるからであろう。夕霧巻という巻の中では、光源氏は「六条の院」「院」として、頭中将は「大殿」として描かれており、ここにも皇統と藤原氏の構図が隠されている。

嫡男柏木の妻である落葉宮を夕霧に奪われるだけでなく、左大臣邸を伝領した雲居雁を粗略に扱われたことも、頭中将家にとっては許し難いことであろう。頭中将の娘としては、冷泉帝后妃弘徽殿女御や近江の君、光源氏の養女玉鬘が登場しているが、娘たちの中で婿を迎え邸を伝領したのは雲居雁だけであり、雲居雁に邸を受け継ぎ家を繁栄させていく役割が担わされているようである。しかも、雲居雁が住む「三条殿」は左大臣・大宮・葵の上が住んだ邸であり、ここには左大臣家の家の記憶が残されている。その雲居雁が夕霧の正妻から相対的な妻の立場へと転じたことは、頭中将家にとって看過できない事態である。

しかし、夕霧にとっては、頭中将家の影響下を離れる絶好の機会なのではないか。それまで夕霧は頭中将家の婿として、藤原氏の影響下に置かれていた。旧左大臣邸である三条殿を受け継ぐということは、母葵の上を通じて左大臣家の家の系譜に連なるということを暗示している。その三条殿を離れ落葉宮が住む一条の宮に居を移したということは、夕霧が藤原氏の影響下からの離脱を志向していることを意味する。夕霧は光源氏の嫡男であり、皇統に連なる人物であるが、物語はこうした形で夕霧を藤原氏の系譜から引き離していく。夕霧巻は雲居雁との夫婦関係の行方を語らずに幕を閉じるが、終わりに近づいてきた正編の物語は、最後に夕霧という次の世代の政治家をめぐる皇統と藤原氏の対立を描き出すのであり、そこに夕霧巻という挿話的な巻の意義を見出すことが出来るのではないか。第二部

の女三宮をめぐる物語の構図を再び描きながら、そこに新しく皇統と藤原氏の「家」の問題を加えることで、女三宮の物語とは異なる物語を紡いでいく。夕霧巻で用いられる「三条殿」「一条の宮」「大殿」「六条の院」という人物呼称・邸第呼称は、皇統と藤原氏の対立構造を形象化するものであり、書き手は呼称を巧みに操りながら夕霧巻独自の世界を描いていくのである。

三、皇統と藤原氏の二人の妻
―『うつほ物語』源正頼との比較―

以上、人物呼称・邸第呼称から、夕霧巻を読み解いてきた。読者は第三部の一番最初の巻匂宮巻において、夕霧巻の顛末を知ることが出来る。

（六条院ノ）丑寅の町に、かの一条の宮を渡したてまつり給てなむ、三条殿と、夜ごとに十五日づつ、うるはしう通ひすみ給ける。（(4)二一四頁）

二人の妻のもとに十五日ずつ通うという「まめ人」夕霧らしいが決着が語られる。ここでは、「一条の宮」落葉宮と「三条殿」雲居雁が、夕霧の二人の妻として明確に対比されている。これ以降、夕霧の二人の妻をそれぞれ「一条の宮」（匂宮(4)二二三頁）と「三条殿」（竹河(4)二五四頁）と呼ぶ例が見られる。第三部において、物語が夕霧の二人の妻に邸第の名に因む対比的な呼称を用いるのは、夕霧が「十五日づつ」（傍線部）二人の妻のもとへ等しく通っているためであろう。均衡した力関係の中で収まった二人の女君の位置づけを、対照的な呼称を用いて表しているのである。

二人の妻に十五日ずつ通うという設定は、先学が指摘する通り、[33]『うつほ物語』の源正頼の二人の妻から生まれているだろう。藤原の君の巻では、源正頼は「時の太政大臣の、一人娘」（六七頁）と「時の帝の御妹、女一の皇女」（同）の二人と結婚した。正頼は二人の妻とともに大宮が伝領した三条院に住み、それぞれから数多くの子女が誕生した。ヒロインあて宮が大宮腹であることから大宮の方がやや優位であるように思われるが、楼の上上巻では、「左のおとどは、宮、大殿、いとうるはしくこそ、十五夜づつおはしつつ」（八四五頁）とあり、正頼が「十五夜づつ」等しく通っていることが語られている。『源氏物語』は『うつほ物語』に着想を得て、夕霧巻の恋愛騒動を穏当なところに収めたのである。

匂宮巻で明かされたこの決着については、歴史的な実態と比較して論じられてきたところである。律令制の法的な

規定を重視し平安時代の婚姻形態を一夫一妻多妾制であると論じた工藤重矩氏は、夕霧が雲居雁と離婚しない限り落葉宮は妾に過ぎず、十五日ずつ通うといった措置も「夕霧の気持の問題」と論じている。[34] 一方で、増田繁夫氏は「二人の妻に等しく通うことは、その二人が妻として等しい地位にあることを示す何よりの確証なのである」と工藤氏に反論している。[35] しかし、「十五日づつ」通うという設定そのものが、現実を越えた物語的なものではないだろうか。[36] 男に自らのもとだけに通ってきてほしいと願うのは女の普通の願望である。『蜻蛉日記』の作者藤原道綱母は、「さらに、身には、『三十日三十夜はわがもとに』と言はむ」（中巻・一六九頁）と「三十日三十夜」自らのもとへ通ってきてほしいと願っている。『うつほ物語』楼の上上巻では、「十五夜づつ」二人の妻に通う源正頼に対し、藤原兼雅は「殿は、一月を、二十五日はこなた（＝俊蔭娘）、今五夜をは宮の御方、この対などには通ひたまう」（八四四頁）と、俊蔭娘のもとへ「二十五日」通うと設定することで、兼雅の俊蔭娘への深い愛を印象づける。十五日ずつ通うというのは、男を独占したい、あるいはほかの女よりも優位に立ちたいという女の願望に収拾をつけるための、最も現実的な手段の一つだろう。しかし、現実的な手段であるからと言って、現実にその手段を取ることができるかと言えば、そうではあるまい。事実、『うつほ物語』では、兼雅の息子仲忠が俊蔭娘への偏愛を諫めて、「こなたに十日、宮の御方に十日、今十日を三所におはしまさせむ」（八四四頁）と十日ずつ等しく通うことを提案している。二人の女君のもとへ月に「十五日づつ」と表現が現実を越えた象徴的なものであり、均衡状態に収まった二人の妻の存在は多分に物語的であるように思われる。

何故このような二人の妻の処遇の仕方を描くのだろうか。その背景に、内親王と太政大臣の娘という至高の血筋を引く二人の女君を妻に持つという現実を超えた結婚のあり方があることを見出したい。

『うつほ物語』源正頼の妻となった大宮は「時の帝の御妹、女一の皇女と聞こゆる、后腹におはします」（六七頁）とあり、后腹の女一の宮ながら、父帝の許しのもと正頼に降嫁した。平安時代の皇女の結婚については、今井源衛氏[37]、後藤祥子氏[38]が早くに論じ、今井久代氏が、皇女の結婚には父帝裁可のもと降嫁する裁可婚と、密かに通じ先に既成事実を作ってしまう私通婚の二つの形態があることを明らかにしている。[39] 今井氏が父帝裁可のもと降嫁する初例は、三条天皇皇女諟子内親王であると指摘している。こ

のことから、父帝裁可のもと皇女が降嫁するという設定は物語の方が現実よりも先行していると言えるだろう。そればかりか、大宮は后腹の第一皇女であり、皇女の中でも最も格の高い人物である。后腹の第一皇女が父帝裁可のもと降嫁するという異例さは、他の物語作品においても類例が見られないことから明らかである。[40] その上、物語は大宮との婚姻よりも前に正頼が「時の太政大臣の、一人娘」（六七頁）である大殿の上と結婚していたとする。この結果、正頼は大宮を通じて皇統と、大殿の上を通じて藤原氏と密接な関係を築いていく。内親王と太政大臣の娘の二人の妻を持つという結婚のあり方は、正頼の卓越性を示すだけでなく、正頼を皇統と藤原氏双方に繋がりのある特別な権勢家に押し上げている。

正頼の結婚に照らせば、『源氏物語』の夕霧の二人の妻も皇統と藤原氏という対比的な血筋であることが理解できる。雲居雁は太政大臣を務めた頭中将（致仕大臣）の娘であり、藤原氏出身である。かつて父頭中将（太政大臣）が雲居雁を「わがやどの藤の色ときたそかれにたづねやはこぬ春のなごりを」（藤裏葉(3)一七八頁）と藤の花に喩えたことは、その出自を象徴しているだろう。一方で、落葉宮は朱雀院の第二皇女、皇統の人物である。女三宮に比べその血筋は劣るものの、国譲が行われた若菜下巻以降は当代の帝の異母姉妹である。光源氏は落葉宮について「かの御子こそは、ここに物し給入道の宮（＝女三宮）より、さしつぎにはらうたうしたまひけれ。」（夕霧(4)一三四頁）と話しており、女三宮の次に重んじられたようである。夕霧は落葉宮を通して皇統と、雲居雁を通して藤原氏と密接な関係を築くことができるのである。

史上、桓武朝から一条朝までの間で、内親王と太政大臣の娘双方を妻に持った男性貴族はいない。[41] 内親王と太政大臣の娘を妻にし、皇統と藤原氏双方に繋がることで権力獲得を企図することは、現実世界を超越した物語的な設定であり、源氏である源正頼や夕霧を藤原氏を圧倒する政治家へと押し上げている。ここに、十五日ずつ二人の妻に通うという設定を源正頼や夕霧に付与する必要性が生まれているのではないか。二人の妻双方が政権獲得に欠かせない存在であり、「十五日づつ」「十五夜づつ」という象徴的な表現によってその均衡状態が表されているのである。

再び呼称の問題に立ち返れば、『うつほ物語』では大宮が「大宮」、太政大臣の娘が「大殿の上」と呼ばれることが多い。源正頼と二人の妻は三条院に同居していることから、邸の名を用いずに「大宮」と「大殿の上」と呼ばれるのだ

が、「宮」と「殿」を用いて皇統と藤原氏の出自を象徴するかのような呼称が用いられている。第三部でも同様に、落葉宮が「一条の宮」、雲居雁が「三条殿」と、「宮」と「殿」と立場を対比して呼ばれることに気づかされる。正頼の妻たちとは異なり、夕霧の二人の妻は別々の邸に住んでいるために、邸第呼称がその女君自身を指す呼称として用いられているのだが、皇統の妻と藤原氏の妻という対照的な血筋を引く人物の対比に呼応する形で、夕霧巻で見られた「一条の宮」と「三条殿」という「宮」と「殿」の対比的な呼称が用いられているのである。

以上、第三節では匂宮巻の叙述と『うつほ物語』源正頼を比較し、第三部世界での落葉宮と雲居雁について考察してきた。内親王と太政大臣の娘の二人を妻にするという異例の結婚をした源正頼や夕霧は、妻を通して皇統と藤原氏の双方に繋がりを持ち、権勢家へと昇っていく。それは、六条院世界を作り上げた父光源氏や右大臣家の婿となった舅頭中将とは異なる、夕霧の新しい家の創出であろう。夫の権力獲得を支える二人の妻は均衡状態でなくてはならず、従って「十五日づつ」邸に通うという表現や「一条の宮」「三条殿」という対比的な呼称が用いられている。第三部世界は『うつほ物語』の源正頼に着想を得て、夕霧巻で描いた夕霧をめぐる皇統と藤原氏の対立構造を、表面的な均衡状態へと落とし込んだ。第三部の物語は夕霧という皇統と藤原氏双方に繋がりを持つ政治家を作り上げた上で、皇統の光源氏の息子として表面上は扱われながら、その実藤原氏の血を引く薫という人物を物語の中心として据えるのである。

おわりに

以上、「一条の宮」「三条殿」などの人物呼称・邸第呼称の表現性に注目し、夕霧巻で描かれる藤原氏と皇統の対立構造を明らかにしてきた。「一条の宮」落葉宮を夕霧が得るということは、その反面正妻雲居雁は「三条殿」という相対的な妻の立場へと転じることを意味する。夕霧巻は、女三宮の出現によって、紫の上が「対の上」と呼ばれる第二部の物語を、皇女落葉宮と藤原氏太政大臣の娘雲居雁という二人の女君に託して描いているのである。しかし、女三宮の物語とは性質を異にする。というのも、後ろ盾が弱い紫の上とは異なり、雲居雁は太政大臣家の娘であり、父頭中将は「大殿」としてこの問題に関与するからである。夕霧巻はこの騒動の顛末を語らないが、第三部の物語は夕霧を『うつほ物語』の源正頼のような皇統と藤原氏双方に

繋がりを持つ特別な権勢家へと変貌させる。物語は太政大臣へと昇ることが予告されている夕霧に、六条院を造営した父光源氏とは異なる権力獲得の道筋を用意したのであろう。夕霧は藤原氏である頭中将家の婿という立場から脱却し、皇統と藤原氏の二人の妻の並置という新たな「家」を創出するのである。

夕霧巻には、「三条殿」「一条の宮」「大殿」「六条の院」などの人物呼称・邸第呼称が数多く用いられているが、これは、夕霧巻が藤原氏と皇統の思惑が複雑に絡み合う巻だからではないか。「一条の宮」の出現によって、雲居雁は「三条殿」という相対的な妻の座へと転じる。頭中将家は「大殿」としてこの問題に関与する一方で、光源氏は「六条の院」という脇役に徹する。こうした呼称には、皇統と藤原氏の家同士の対立の構図が表されているのである。書き手は皇統と藤原氏の対立構造を描き出す一つの方法として、人物呼称・邸第呼称を巧みに操っているのであり、人物呼称・邸第呼称の方法意識を明らかにするという意味では、本稿は前稿で提唱した「邸第呼称論」を構築する一つの試みでもある。

【注】

（1）藤村潔「宇治十帖の予告」（『源氏物語の構造』桜楓社、一九六六年、一九六四年初出）

（2）伊藤博「夕霧物語の位相」（『源氏物語の原点』明治書院、一九八〇年、一九六九年初出）

（3）石田穣二「夕霧の巻について」（『源氏物語論集』桜楓社、一九七一年、一九六六年初出）

（4）森藤侃子「女の宿世―雲居の雁と落葉の宮」（秋山虔・木村正中・清水好子編『講座源氏物語の世界　第七集』有斐閣、一九八三年）

（5）室伏信助「夕霧物語を読む」（『王朝物語史の研究』角川書店、一九九五年、一九八六年初出）、阿部好臣「夕霧の恋―システム破壊の視座」（『物語文学組成論Ⅰ―源氏物語』笠間書院、二〇一一年、一九八七年初出）、小嶋菜温子「「ぬりごめ」の落葉宮―〈家なき子〉夕霧と、タブーの不在」（『源氏物語の性と生誕―王朝文化史論』立教大学出版会、二〇〇四年、一九九三年初出）、鈴木日出男「柏木と夕霧」（『光源氏の世界』放送大学教育振興会、一九九四年）、高木和子「夕霧物語から光源氏物語へ」（『源氏物語の思考』風間書房、二〇〇二年、一九九六年初出）など

（6）小町谷照彦「夕霧の造型と和歌―落葉の宮物語をめぐって

—」（『源氏物語の歌ことば表現』東京大学出版会、一九八四年、一九七四年初出）

（7）上坂信男「小野の霧・宇治の霧」（『源氏物語—その心象序説—』笠間書院、一九七四年、一九六八年初出）、「和歌と自然—夕霧巻の方法」（秋山虔・木村正中・清水好子編『講座源氏物語の世界　第七集』有斐閣、一九八三年）

（8）植田恭代「浸透する「引歌」—『源氏物語』夕霧巻「霧の籬」から」（松井健児編『日本文学研究論文集成6—源氏物語—』若草書房、一九九八年、一九九五年初出）

（9）岩原真代「落葉宮の浮名と社会環境」（『源氏物語の住環境—物語越境論の視界』おうふう、二〇〇八年、二〇〇六年初出）、阿部哲也「夕霧巻試論—「名」の輻輳する物語—」（『東京大学国文学論集』一五、二〇二〇年三月）

（10）諸岡重明「翁のなにがし守りけんやうに—『竹取』引用にみる『源氏物語』夕霧巻の一条御息所と落葉宮の物語—」（『立教大学日本文学』八四、二〇〇〇年七月）、井野葉子「夕霧巻における竹取引用」（『源氏物語　宇治の言の葉』森話社、二〇一一年、二〇〇一年初出）

（11）後藤祥子「皇女の結婚—落葉宮の場合」（『源氏物語の史的空間』東京大学出版会、一九八六年、一九八三年初出）

（12）加藤昌嘉「源氏物語夕霧巻の機構（メカニズム）—致仕大臣一族と夕霧勢力圏」（『古代中世文学論考　第4集』新典社、二〇〇〇年）

（13）久下裕利「夕霧巻と宇治十帖—落葉の宮獲得の要因—」（『源氏物語の記憶—時代との交差』武蔵野書院、二〇一七年、二〇一一年初出）

（14）平安時代の婚姻研究の先駆者である高群逸枝氏は、妻問婚からやがて同居婚へと移行することを指摘した（『招婿婚の研究』大日本雄弁会講談社、一九五三年）。高群説は修正されつつあるものの、婚姻研究において居住形態という観点を持ち込んだ意義は大きい。

（15）櫛井亜依「『源氏物語』二条東院から六条院の階梯—邸第と人物の据え直し—」（『文化学年報』五九、二〇一〇年三月）、「『源氏物語』六条院における家と系図—邸第呼称「大殿」に着目して—」（『同志社国文学』七七、二〇一二年十二月）、「『源氏物語』少女巻における六条院造営の意義—「ふる宮」という表現をめぐって—」（『文化学年報』六〇、二〇一一年三月）

（16）飯田実花「光源氏所有邸第における「院」呼称　『源氏物語』の邸第呼称法則」（『詞林』七〇、二〇二一年十一月）、「女三宮の「三条宮」—邸第呼称のもつ意味—」（『中古文学』一一一、二〇二三年五月）

(17) 拙稿「『源氏物語』邸第呼称の方法意識―左・右大臣家と頭中将家を中心に―」（『中古文学』一一一、二〇二三年五月）

(18) 梅村恵子「摂関期の正妻」（青木和夫先生還暦記念会『日本古代の政治と文化』吉川弘文館、一九八七年）。氏は、多妻の中にただ一人の優越した地位にいる正妻がいることを、母親の違いによる子女の位階昇進の差から論じている。

(19) 福長進執筆条「源倫子」（大津透・池田尚隆編『藤原道長事典―御堂関白記からみる貴族社会―』思文閣出版、二〇一七年）

(20) 『栄花物語』における源倫子と源明子の呼称を調査した園明美氏によれば、長徳元年（995）道長に内覧の宣旨を下されたのを境に、倫子は「土御門の上」「土御門の姫君」から「殿の上」「上」へ、明子は「宮の御方」から「高松」「高松殿の上」へと呼称が変化する（『王朝摂関期の「妻」たち―平安貴族の愛と結婚』新典社、二〇一〇年）。

(21) 鵜飼祐江「『源氏物語』の妻妾の呼称―光源氏の妻妾の呼称の独自性―」（『日本文学』六二―一二、二〇一三年一二月）

(22) 正編における代表的な紫の上の呼称を私に調査した。なお、（　）内は、それぞれ初出・用例数を示す。
若草（若紫巻、二例）　初草（若紫巻、一例）
紫の君（末摘花巻、一例）　対の姫君（葵巻、四例）
二条の君（葵巻、三例）　二条院の姫君（須磨巻、一例）
二条の上（蓬生巻、二例）
対の上（蓬生巻、二七例うち若菜上巻以降一〇例）
対の方（若菜下巻、一例）　上（薄雲巻、三五例）
殿の上（玉鬘巻、二例）　春のおとど（初音巻、一例）
春の上（胡蝶巻、三例）　南のおとど（初音巻、三例）
南の上（野分巻）　紫の上（蛍巻、十二例）
大殿の北の方（真木柱巻、二例）
二条の院の上（若菜下巻、一例）

(23) 玉上琢彌『源氏物語評釈』（角川書店、一九六六年）

(24) 森藤侃子「紫上は光源氏の正妻か」（『人文学報』九六、一九七三年三月）、田中恭子「源氏物語の人物造型における呼称の意義」（『関根慶子教授退官記念　寝覚物語対校・平安文学論集』風間書房、一九七五年）、河村幸枝「『梅枝』『藤裏葉』巻における紫の上の呼称について」（『解釈』三九―七、一九九三年七月）、木村佳織「紫上の妻としての地位―呼称と寝殿居住の問題をめぐって―」（『中古文学』五二、一九九三年十一月）、工藤重矩「若菜巻以降の紫上の妻としての立場」（『平安朝の結婚制度と文学』風間書房、一九九四年）、高木和子「結婚制度と『源氏物語』の論理―光源氏と紫の上の関係の独自性」（『源氏物語の思考』風間書房、二

○○二年、二○○二年初出）、工藤重矩「紫の上に対する呼称―「対の上」の用法―」（『源氏物語の婚姻と和歌解釈』風間書房、二○○九年、二○○二年初出）、鵜飼祐江「「対の上」という呼称―特異な呼称の描くもの」（『中古文学』八五、二○一○年六月）、青島麻子「「対」の女君―多妻の視座と「対の上」をめぐって―」（『源氏物語　虚構の婚姻』武蔵野書院、二○一五年）など

(25) 『河海抄』松風巻に「寝殿は妻室の居所也」という注がある（玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』角川書店、一九六八年）。

(26) 木村（24）論文

(27) 注（5）に同じ

(28) 日向一雅「宿世の物語の構造―父と子―」（『源氏物語の主題―「家」の遺志と宿世の物語の構造』桜楓社、一九八三年、一九七九年初出）

(29) 田坂憲二「夕霧巻の構造について―夕霧＝雲居雁の側面から―」（『源氏物語の人物と構想』和泉書院、一九九三年、一九八三年初出）

(30) 陳斐寧「「大殿」としての光源氏―執政者への方法をめぐって―」（『国文学研究ノート』四○、二○○六年一月）

(31) 牧野裕子「青表紙本『源氏物語』における二条右大臣と朱雀朝―河内本本文との「大殿」呼称の異同から―」（横井孝・久下裕利編『源氏物語の新研究―本文と表現を考える』新典社、二○○八年）

(32) 田坂憲二「頭中将の後半生―源氏物語の政治と人間―」（『源氏物語の人物と構想』和泉書院、一九九三年、一九九二年初出）

(33) 例えば、『新編日本古典文学全集』（小学館）頭注でも夕霧と源正頼の類似を指摘する。

(34) 工藤重矩「『源氏物語』と一夫一妻制」（『平安朝の結婚制度と文学』風間書房、一九九四年）

(35) 増田繁夫「紫上の妻としての地位」（森一郎・岩佐美代子・坂本共展編『源氏物語の展望　第一輯』三弥井書店、二○○七年）

(36) 工藤重矩「源正頼の二人の北の方」（注34同書）

(37) 今井源衛「女三宮の降嫁」（『源氏物語の研究』未来社、一九六二年、一九五五年初出）

(38) 後藤（11）論文

(39) 今井久代「皇女の結婚―女三宮降嫁の呼びさますもの―」（『源氏物語構造論―作中人物の動態をめぐって』風間書房、二○○一年、一九八九年初出）

(40) 勝亦志織「平安王朝文学における〈皇女〉」（『物語の〈皇女〉―もうひとつの王朝物語史―』笠間書院、二○一○年）

（41）桓武朝から一条朝にかけて臣下に降嫁した内親王は史料で確認される限り十一人（今井（37）論文、後藤（11）論文、今井（39）論文参照。またすでに拙稿「女三宮の裳着―朱雀院柏梁殿という場に注目して―」（『東京大学国文学論集』一八、二〇二三年三月）で皇女の降嫁について私に調査している）。そのうち夫に他の妻がいたのは、宇多天皇皇女源順子（夫は藤原忠平）、醍醐天皇皇女勤子内親王（夫は藤原師輔）、醍醐天皇皇女雅子内親王（夫は藤原師輔）、醍醐天皇皇女康子内親王（夫は藤原師輔）、醍醐天皇皇女靖子内親王（夫は藤原師氏）、村上天皇皇女保子内親王（夫は藤原兼家）、村上天皇皇女盛子内親王（夫は藤原顕光）の七人と見られる。全ての場合において、夫にほかに妻がいたとしても受領階級の娘であり、公卿の娘である例は見当たらない。

＊『蜻蛉日記』は新編日本古典文学全集（小学館）、『うつほ物語』は室城秀之校注『うつほ物語』（桜楓社、一九九五年）に依る。

（付記）本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費（ＤＣ２）による研究成果の一部である。